

文芸論にみる張炎詞論の受容

松尾 肇子

張炎、字は叔夏、号は玉田・樂笑翁。淳祐八年（一二四八）、南宋の名家に生まれたが、南宋滅亡後は遺民として過ごし、延祐七年（一二三〇）頃に卒したと推定されている。彼は王沂孫・周密と共に南宋末のすぐれた詠物詞人であり、『山中白雲詞』八巻の詞集が伝わる。清朝詞壇では、特に浙西派に重んぜられ、戈載は『宋七家詞選』の中で張炎を「詞家の正宗」と称えるなど、典範の一人とされた。また、張炎は、自らの詞学の集大成として最晩年に詞論書『詞源』を著した。それはすでに元朝になってからのことである。清朝に至り彼の詞が高く評価されるようになる、その詞論も注目されることとなった。「詞話叢編」を検すると三十を越える詞話に引用されており、清朝詞壇に与えた影響の大きさが窺える。

本稿では『詞源』の文章が引用された状況を概観することによって詞論受容の問題を考えてみたい。具体的には、引用本文から、古人が手にした『詞源』はどのテキストだったのか、そしてそのどこに着目したのかを明らかにする。筆者が先に調査した『詞源』の出版状況や諸本の異同と対照することによって、出版が『詞源』受容に及ぼし

た影響を考察することができらる。同時に、各時期の文芸の状況を背景に張炎の主張のどこがどのように評価されたのかを示したいと思う。

一、元朝における『詞源』

現在通行している『詞源』は上下二巻、底本は「元起善齋鈔本」をうたう。巻上は音楽論、巻下は文学論を展開するが、上下巻で分けられた主題には有機的な連関が見出だし難い。また図表を備え文言で統一されている巻上に比べて、巻下は白話が混在する文章である。詞社での実際の指導をもとに先に成立した巻下に、巻上を書き加えたものである。そうした成立を反映するかのように、『詞源』には、上下二巻からなる『詞源』名諸本と、巻下に対応する『樂府指迷』名諸本の二系統がある。それぞれの構成は、『詞源』巻下では、序、音譜、拍眼、製曲、句法、字面、虚字、清空、意趣、詠物、節序、賦情、離情、令曲の十五の本篇と雑論十五条、さらに末尾に楊守齋作詞五要を付す。これに対して最も流布している明刊本の『樂府指迷』では、「音譜」「拍眼」を除く十三篇と雑論六条（十五条に対応させると第二条、第三および四条、第五条、第六の末尾および七条、第八条、第十条）、末尾には楊誠齋作詞五要を付録し、『詞源』巻下に比して節略がある。

さて、張炎の死後間もなく、その影響を強く受けた文芸論が二種著された。張炎の直接の弟子である陸輔之（生卒年不詳）の詞論『詞旨』と、やや後の顧徳輝（一三一六—一三六九）の曲論『製曲十六観』である。『詞旨』の章立ては次のとおり。

○ 詞説七則、属対凡三十八則、樂笑翁奇対凡二十三則、警句凡九十二則、樂笑翁警句凡十三則、詞眼凡二十六則、

單字集虛凡三十三字、兩字集虛(欠)、三字集虛(欠)、

「樂笑翁奇対」「樂笑翁警句」は張炎の詞句の摘要であつて、張炎の作風に倣おうとする意図が明白である。また次のように言う。

○詞源云、清空二字、亦一生受用不尽、指迷之妙、尽在是矣。学者必在心伝耳伝、以心会意、当有悟入処。然須跳出窠臼外、時出新意、自成一家。若屋下架屋、則為人之賤僕矣。(「詞説七則」其五)

ここには填詞の要諦が清空説にあると明確に述べている。陸輔之は張炎の直弟子であるので、詞会の席上、師の言葉聞き書きした可能性も高い。

しかし元末明初の顧徳輝になると読書によつて詞学を学んだに違いない。彼の『製曲十六観』は「序」以外の十六条各末尾に「製曲者当作此観」の一文を置く曲論だが、その大部分は張炎の詞論に若干の加工を施したものである。さらに文字の異同から、『樂府指迷』名系テキストによつたことが推測される。引用の状況は次のとおり。書名を記さない条の出典は『樂府指迷』名テキスト、『詞源』名テキストとの対応は()内に記した。

第一条：序、第二条：製曲、第三条：句法、第四条：字面、第五条：虚字、第六条：清空、第七条：意趣・詠物および『詞旨』『詞説七則』其五、第八条：令曲、第九条：雜論第一(『詞源』第二条)寛工の説、第十条：雜論第四(『詞源』第七条)雅正の説、第十一条：用事、第十二条：詠物、第十三条：雜論第二(『詞源』第三条)三不和の説、第十四条：賦情、第十五条：節序、第十六条：離情、第十七条：不詳および『中原音韻』『陰陽』用陰字法・用陽字法

『詞源』巻下のほかに、先に挙げた『詞旨』『詞説七則』其五と『中原音韻』とからの抄出に基づいている。『詞旨』が引用されていることから、元朝においてすでに『詞源』には上下巻の二巻本とは別に、『樂府指迷』名系統の巻

下のみテキストが『詞旨』と合わせて通行していたと推測できる。

また『製曲十六観』は曲論を標榜しているにもかかわらず、曲論である『中原音韻』二巻からは曲のメロディと歌辞の音調との和合を説く「陰陽」の一条しか引用しない。張炎の死後すみやかに、あるいは彼の在世中から、『詞源』は曲に応用可能な歌辞論として受け入れられたと考えられる。だが上梓されることのなかった『詞源』は広く知られることはなかったように思われる。^②

二、『樂府指迷』名諸本の出版と明の詞論

一般的に言って明朝は詞の衰退期とされる。小説や演劇の発展、古文辞派や公安派、竟陵派と華々しい詩文の陰に隠れて明詞が取り上げられることはない。しかし『全宋詞』に収録する詞は一三三〇人余の二万首弱、『全明詞』^③は一三九〇人余の約二万首と、識字層の拡大を考慮すれば割合としては少ないが、なお一定の受容層は存在したと言えよう。その情況は大きく二期に分けられるだろう。明朝初期は元末と連続していた。元・至大二年（一三〇九）に生まれ明・建文三年（一四〇二）に没した邵亨貞は南宋・周密の「傲齋十解」の後を襲って「擬古十首」をつくり、南宋末の詞壇を敬慕している。また、重陽の節句に友人たちと詞会を開いたり、「龍洲先生（劉過）以此詞詠指甲・小脚、為絶代膽炙」と序して美人の眉と目を詠じたりした^④。これらは張炎の詞論のそれぞれ節序篇・詠物篇と同じ趣旨で、少なくとも彼の当時までは詞壇一般の認識が張炎のそれと連続していたと言えよう。永樂（一四〇三）（二四）以後には変化が生じたようで、南宋詞に対する評価は下降した。万曆（一五七三）一六一九以後においては『花草粹編』や『草堂詩余』などの詞選集が幾種類も出版されたことが示すように、民間出版業のめざましい発展によっ

て、詞を読むことは容易になった。作品もこの時期以後のほうが多い。

そこで、まず張炎詞論の明朝におけるテキスト流布の状況を概観すると、明朝においては張炎の詞論は二巻本の『詞源』としてではなく、巻下だけが『樂府指迷』の名で受容されたと言ってよい。鈔本としては、北京図書館が明鈔本『詞源』^⑤を所蔵する。これは二巻本『詞源』である。鈔本の『詞源』はほかにも存在しただろうが、ごく一部に知られるにとどまったと推測される。一方の『詞源』巻下を節略したテキストの刊行は明朝中頃で、書名は『樂府指迷』となっている。この『樂府指迷』名テキストには、一巻のものと『詞旨』と合刻して二巻としたものの二種がある。

『樂府指迷』名一巻本は、明の茅一相等編『欣賞編』第八冊、『広百川学海』壬集、『説郭統』弓三十四に収載される三本がまず出版されたと推測される。この三本は、同一の版木を用いており、いずれも万暦以後の出版であろう。^⑥

またこれとは別系統の『樂府指迷』名一巻本に、『詩余広選』^⑦付刻の「雑説」冒頭に掲載された「樂府指迷 張玉田」がある。各篇および雑論各条は改行するだけで篇名を記さず、意趣・賦情・離情の各篇を欠き、本文にも脱落が多い。^⑧ただし雑論十五条すべてを収録する点はこの『樂府指迷』名諸本と異なる。さらに「樂府指迷」に続けて「作詞五要 楊万里」を載せるが、別本として並列する。「樂府指迷」「作詞五要」ともにその他の明刊本との文字の異同が多く、別系統のテキストとしてよい。なお、「氏籍」に「張玉田 著樂府指迷」とのみ記し、また雑説所収の他の詞論の作者については本姓名を挙げているところを見ると、編者の卓人月（二六〇六―三六）は張玉田を張炎と同定できなかったと思われる。

陳継儒輯「宝顔堂秘笈続函」収載の『樂府指迷』（以下、続秘笈本と称する）は、『詞源』巻下を巻上とし、陸輔之の『詞

『を巻下とする二巻本であるが、その本文は基本的には欣賞編と同じ。「宝顔堂秘笈正集」の序は万曆三十四年（二六〇六）、「広集」の序は万曆四十三年（二六一五）であるので、続集所収のこのテキストはこの間の八年間に刻されたことになる。

このように『樂府指迷』名テキストが何度も刊行されたのは、詞を填する人々に歓迎されたからだろう。『詩余広選』には張炎の「樂府指迷」、万曆十一年（二五八三）刊『花草粹編』十二卷は南宋・沈義父の「樂府指迷」等と、詞選集に詞論を付録したのも読者の要求があつてのことと思われる。

ただし、明朝では詞論それ自体を研究の対象とするのではなく、填詞の参考として読まれたようである。執筆された詞話は少なく、『詞話叢編』には陳霆（?～一五一五頃）の『渚山堂詞話』（嘉靖刊本）、王世貞（一五二六～九〇）の『芸園卮言』、俞彦（万曆二十九年（二六〇〇）の進士）の『爰園詞話』、楊慎（一四八五～一五五九）の『詞品』（嘉靖二十九年（二五五〇）序）の四種が収載されているが、これらに張炎詞論の引用は見られない。『渚山堂詞話』の著者陳霆および『詞品』の著者楊慎は年代的には刊本あるいは鈔本の『詞源』を目にした可能性は低い。ただ『芸園卮言』の著者王世貞は古文辞派後七子の一人であると同時に、曲論も著し、当時有数の蔵書家でもあつたので、検討を要する。

王世貞は詞では正宗変体の説をたて、その影響は大きかった。すなわち彼は正宗として李煜、晏殊、晏幾道、柳永、張先、周邦彦、秦觀、李清照の名を挙げ、北宋詞を高く評価した。それは陶子珍が「明代詞選、就内容方面言、其整体選詞之趨勢、以《草堂詩余》為發展主軸」、「詞選中作品數量最多之前三位者、…以北宋周邦彦・蘇軾・秦觀三人詞作、入選之比例最高」と言うのと軌を一にするものである。蔵書家である王世貞の場合、『樂府指迷』名テキストを見ていた可能性は否定できず、もし見ていたとすれば、自らの主張と異なつて姜夔を最高の詞人として称揚し南宋詞を評価する張炎には敢えて言及しなかつたとも考えられる。

ここで、他の文芸論に目を転じてみると、張炎詞論の眼目である「清空」の語は、王世貞の後輩である胡応麟の詩論に見出すことができる。

胡応麟（生卒年不詳）は王世貞に激賞された詩人でまた学者であり、四万二千三百八十四卷^⑧を所蔵した当時屈指の蔵書家でもあった。その詩論、万曆十八年（一五九〇）序を持つ『詩藪』の外篇卷一「周漢」には、

○詩与文体迥不類、文尚典実、詩貴清空、詩主風神、文先理道、

とあり、清空は詩の理想の境地を指すかのようなのである。^⑩しかし、個々の項目における清空を検討すると必ずしも褒義ではない。

○五言律体、極盛於唐、要其大端、亦有二格、陳杜沈宋典麗精工、王孟儲韋清空閑遠、此其概也、（内篇卷四「近体上・五言」）

唐詩の五言律詩は「典麗精工」と「清空閑遠」との二種の格調に分けられ、後者の詩人として王維・孟浩然・儲光羲・韋応物の名があげられている。^⑪彼らは盛唐から中唐にかけて活躍した自然詩人である。また中唐の詩風についても次のように清空と評しているが、これは短詩型に適した詩風であつて七言律詩や五言排律にはふさわしくないと見ている。

○初唐体質濃厚、格調整齊、時有近拙近板処、盛唐氣象渾成、神韻軒拳、時有太実太繁処、中唐淘洗清空、写送流亮、七言律至是、殆於無可指摘、而体格漸卑、氣運日薄、衰態畢露矣、（内篇卷五「近体中・七言」）

○大概中唐以後、稍厭精華、漸趨淡浄、故五七言律清空流暢、時有可觀。至排律亦仿此、則躓矣、（内篇卷四「近体上・五言」）

これらの清空は「典実・典麗・濃厚・渾成」と対照されている。そしてまた次のように清空は「淡」と関連し、そ

うした詩風は弱さに陥りやすい。

○唐以淡名者、張王韋孟四家、…蓋詩富碩則格調易高、清空則体気易弱、(内篇卷四「近体上・五言」)

○七言律声長語縱、体既近靡、字櫛句比、格尤易下、材富力強、猶或難之、清空文弱、可登此檀乎、(内篇卷三「古体下・七言」)

以上のように、胡応麟の詩論においては、清空は詩のひとつのスタイルではあるが、盛唐の詩を高く評価した古文辞派にあつて、中唐の詩風をいう清空の語が貶義に傾くのは当然のことであろう。ここでは盛唐詩中唐詩評価の議論には立ち入らないこととするが、それでは胡応麟の清空は何によつたのだろうか。

当時屈指の蔵書家だつた胡応麟であれば、鈔本『詞源』あるいは刊本の『樂府指迷』名テキストを見ていた可能性は高い。ただどのテキストであつても、張炎自身は清空篇に「清空質実之説」を標榜しており、「清空」の対義語は「質実」であるべきだろう。にもかかわらず胡応麟が質実にまったく触れないのは、彼が依つたのが張炎の詞論ではなく、周密の詩論だつたからではないか。

南宋の周密は張炎の父と同世代で、張炎父子と二代にわたつて交遊のあつた人物であり、多くの筆記を残している。胡応麟は宋末の馬端臨の『文獻通考』について述べた文章に、当時の状況を次のように言う。

○南渡以還書多端臨『通考』所未載者、余所見小說家如『西溪叢語』『癸辛雜識』等不下數十種。蓋馬氏所攬大率本晁・陳二家、自余宋末諸人所著或未及行世、『通考』雖成於元世、其時兵革動勦、無緣掇拾、今承平日久、故漸出人間、不得以為偽也。(『少室山房筆叢』「経籍会通」三)

宋末の筆記の多くは当時ようやく刊行された。右に言及されている『癸辛雜識』は周密の著書である。胡応麟の文章にはこのほか『齊東野語』や『武林旧事』^⑧も引かれていて、周密の筆記に対する胡応麟の評価は高い。その周

密の『浩然齋雅談』巻上には、

○水心翁（葉適）以扶雲漢分天章之才、未嘗輕可一世、乃于四靈若自以為不及者、何耶。此即昌黎之于東野、六一之于宛陵也。惟其富贍雄偉、欲為清空而不可得、

とある。ここでは、清空は永嘉の四靈の詩の境界を指し、「富贍雄偉」である葉適には作れない作風だといわれている。先に挙げた胡応麟の「富碩則格調易高、清空則体気易弱」は本条を背景にしていると思われる。胡応麟の著作に周密の『浩然齋雅談』の書名を見いだせないで推論の域を出ないが、周密の詩論の影響は考慮すべきであろう。またもしそうならば、張炎の詞論を排した理由が王世貞と同じくその文学的立場なのか、あるいは詩詞の文体を峻別したからなのか、定見を持つに到らない。

胡応麟の依拠した所は断定できないものの、万曆二十五年（二五九八）周子文編著『芸藪談宗』の「少室山房詩評」、崇禎五年（一六三三）許学夷の『詩源弁体』、胡震亨編著『唐音癸籤』などは「胡元瑞（胡応麟の字）曰く」として彼の清空説を紹介している。明人にとっては「胡応麟の清空」だったのである。また、戯曲も作った万曆の進士屠隆の「唐人：悲壯沈鬱、清空流利、迥乎不齊（『芸藪談宗』「与友人論詩」）、明末の京嗣宗の「大曆諸子、一味清空流転、非惟失盛唐之化境、並美大失之矣（『説詩補遺』巻五）」や盧世淮の「万転千迴、清空一気、純是淚点、都無墨痕（『説杜私言』論七言律詩）」もそれを承けて展開した。

次に、曲に目を転じてみよう。明末の天啓四年（一六二四）に刊刻された王驥徳（？）（一六三三）の『曲律』巻三「論用事第二十一」に、

○玉玦句句用事、如盛書櫃子、翻使人厭惡、故不如拜月一味清空、自成一家之為愈也、
の一文がある。「清空」を「用事」と直接関係づけることはすでに胡応麟の『詩藪』に「用事：婉轉清空、了無痕跡、

縦横変幻、莫測端倪（内篇卷四「近体上・五言」）とある。また曲論での言及であるので、王驥徳は『製曲十六観』に依つた可能性もある。この時期であれば『楽府指迷』名テキストは幾種類も出版されていて、直接目にする事ができ、胡応麟の影響だけを受けたとは考えにくい状況が出現していた。それは、清空とは誰のどういう考えかを改めて考察するまでもなく理解が可能な共通の文芸批評用語となつていたということでもあるだろう。

明代後半の状況を総合してみると、万暦以後には『楽府指迷』名テキストが叢書に収載されて出版され、この時期の張炎詞論とは『楽府指迷』として通行した巻下の文学論であつた。清空は比較的知られていたが、詞論がそのまま引用されることはなかつた。その原因を考えてみると、張炎が唱導した雅詞が衰退していたことや、王世貞を典型とする明人の文学的嗜好、すなわち盛唐詩・北宋詞の流行とも関わると思われる。版本の流通だけではこうした状況が一変することはなかつたが、少しずつ変化を促したのではなかつただらうか。

三、清朝前半の『楽府指迷』名諸本の刊行と張炎詞論の普及

清朝の學術は多彩に發展した。詞では、朱彝尊（一六二九～一七〇九）を宗主として清初の詞壇を席卷した浙西派と、張惠言（一七六一～一八〇二）を宗主として清代後期に台頭した常州派が有名である。

神韻説を唱えた詩論家として有名な王士禛（一六三四～一七二二）は、『花草蒙拾』で神韻を適用して詞論を展開している。朱彝尊より五歳年少だが、詞の方面での活躍は朱彝尊よりも早かつたので、浙西派よりも先に言及されるべき存在である。彼の『花草蒙拾』には『詞源』詠物篇に言及して次のように言う。

○張玉田謂詠物最難。体認稍真、則拘而不暢、模写差遠、則晦而不明。（史羨詠物絶唱）

『填詞雜說』の著者沈謙（一六二〇～一六七〇）、『遠志齋詞衷』の著者鄒祇謨（一六三〇？～一六七〇）、『金粟詞話』の著者彭孫遜（一六三一～一七〇〇）らは王士禎と親しい関係にあり、いずれも張炎の詞論を引用する。また直接の引用ではないが、『遠志齋詞衷』の「詠物固不可不似、尤忌刻意太似。取形不如取神、用事不若用意。宋詞至白石、梅溪、始得箇中妙諦」、『金粟詞話』の「詠物詞、極不易工……始幾幾乎与白石、梅溪拮抗今古矣」とも張炎の詠物篇をふまえており、張炎が推賞した白石（姜夔）・梅溪（史達祖）の詠物詞を最高とする評価が共通認識となっていたことを窺わせる。ただし彼らの議論は体系的に張炎の詞論を読み解こうとするものではなく、詠物詞に関心が向かっている。まだ清朝の版行は行われていない時期であり、彼らが読んだのは明刊本『樂府指迷』名系統のテキストだった。王士禎は『花草蒙拾』に『詞旨』から「对句好可得、起句好難得、收拾全籍出場」「前輩謂史梅溪之句法、吳夢窓之字面」を引用しており『詞旨』と合刻された『樂府指迷』名テキストを読んだに違いない。

以上の諸家や彼らに続く浙西詞派は、明朝の北宋詞評価とは異なつて雅詞を提唱し、姜夔・張炎らを称揚した。^⑧張炎の詞論もようやく引用されるようになったのだが、張炎の詞論そのものを研究する前に、詞の復興、詞論の搜集が急がれたようだ。

康熙十八年（一六七九）以前に成つた王又華の『古今詞論』^⑨は時代順に浙西派以前の詞論を集めた詞論研究の資料集といった趣の本だが、巻頭に「楊守齋詞論」として楊纘の「作詞五要」全文を掲げ、次に張炎の製曲・句法・字面・清空・用字・詠物・令曲・雜論（『樂府指迷』第一条、『詞源』第二条）の八篇から一部を抜粋する。彼が引用したのは明刊本ではなく、まだ刊行されていなかった後述の城書室蔵版『山中白雲詞』付録『樂府指迷』と同系統のテキストと推定される。^⑩詞の復興は作品校定の方面でも行われ、清朝において詞を復興するのに大功のあつた万樹（？～一六八七頃）は『詞律』を編集した。康熙二十六年（一六八七）の自叙には「作詞五要」第一要を指す「誠齋

垂法于捫腔」の句がある。万樹が参考としたテキストは、序文中に参考文献として挙げる『詞統』つまり前節の『詩余広選』であろう。また翌年の康熙二十七年（一六八八）には沈雄『古今詞話』徐鉉『詞苑叢談』が刊行された。『古今詞話』は「楊万里（楊誠齋の名）曰」として「作詞五要」を引くので、万樹と同じく『詩余広選』を見たと思われる。²¹

読者の増大はテキストの需要を呼び起こしたのである。このうち清朝前半においては『樂府指迷』名テキストの刊行が続いたが、康熙勅撰雍正四年（一七二六）の「古今圖書集成」文学典詞曲部総論に収録されたものと、同じ雍正四年の序を冠する城書室藏版『山中白雲詞』付録の『玉田先生樂府指迷』（以下、城書室と称する）が早い。このうち古今圖書集成本は二系統の明刊本に詩集などによる校訂を施したものと考えられるが、大部の百科全書であって一般に普及したとは考えにくい。

一方の城書室本については、「楡園叢刻」の編者、許增（一八二四～一九〇三）が、
○曹南巢付刻於白雲詞之後、復加刪乙、所存才什之二三、

と評するとおり、清・曹炳曾校訂の張炎の詞集『山中白雲詞』に付録されたもので、明刊『樂府指迷』名諸本に比べ、全文が短い。「意趣・賦情・離情・作詞五要」の四篇を欠き、雑論篇は、どのテキストよりも脱落が多い。また、篇名を持たず、引用される詞は詞牌だけを挙げ、ほとんど本文を脱落する点は前節に紹介した『詩余広選』付録と同じ。許増の言うような単純な刪節ではなく、明刊本とは別系統の鈔本を刻したと考えられる。

浙西詞派の隆盛にもなつて、『山中白雲詞』の刊行は読者に喜ばれた。曹炳曾は「書姜白石集後」に

○玉田嘗稱白石為野雲孤飛、去留無跡。不惟清虛、兼又騷雅。兩人之詞、実屬一家。余既刻『山中白雲詞』、
欲並雕堯章先生『白石詞』以成合璧、

と述べている。大部な叢書に収録された明刊本の張炎詞論は、購入するにせよ筆鈔するにせよ入手は容易でない。当時の人々には城書室本は『山中白雲詞』とともに読める新資料の出現として好意的に迎えられたものと思われ、『詞苑萃編』（嘉慶十年（一八〇五）成書）、『蒿庵論詞』『詞学集成』の各書は、城書室本を引用している。

さらに続いて『樂府指迷』名テキストが数種類刊行された。その校訂作業は張炎詞論を読み解く作業にことならない。以下にその情況を紹介する。

まず詩話の叢書である乾隆二十九年（一七六四）刊「詩触」（清・朱棧撰）は『樂府指迷』に続けて『詞旨』を置いており、全体の構成は明刊本と同じ。七十一箇所にのぼる統秘笈本との異同のうち六十箇所は挙例の詞句である。古今圖書集成本もこれと同様に挙例の詞句の校訂を行っており、『樂府指迷』名テキストに引用された詞の校訂作業は、各詞集の校訂と相俟って進んだと言えるだろう。

また、城書室本が重要な資料として用いられたことも見逃せない。乾隆四十四年（一七七九）には張宗櫛「詞林紀事」付録『樂府指迷』（以下、紀事本）が刊行された。「作詞五要」は載せず、明刊本を底本として、城書室本および詩触本、それに二巻本も合わせて全面的な校訂を施し、なお文意の通らない箇所には注記を施している。更に詞源篇末の「蒿廬師云、詞既成以下十二句、与唐子西論詩相似」、句法篇末の「蒿廬師云、只要以下四句、名通之論、非経營慘澹者不知也」など、十箇所に解説が付され、張炎の詞論を解説しようという方針が明らかである。

また、次節に述べる『詞源』刊行後になるが、道光十四年（一八三四）刊行の范锴（一七六五～一八四四）の「范声山雜著」所収本（以下、雜著本）は、嘉慶（一七九六～一八二〇）の初めに入手した「鈔本樂府指迷十數頁」を校正したものである。欠文を全面的に補っているほかに雜著本のみ異文が三十六箇所見られ、全面的な校訂が加えられたことがわかる。

道光十六年（一八三六）の序を持つ『戈載（一七八六～一八五〇）の『宋七家詞選』冒頭に付録する「玉田先生樂府指迷」（以下、詞選本と称する）は、雍正序刊城書室本と同文である。戈載は道光八年（一八二八）以前に現在定本とされる秦恩復「詞学叢書」所収の再刊二卷本『詞源』を校訂しており（後述）、『宋七家詞選』にはあえて城書室本を採用したと思われる。こうした研究成果公開の側面を持つ諸本刊行の背景には、この当時、張炎の詞論が注目を集めながらもまだ十分に解明されていなかったことがある。『四庫全書總目』（乾隆三十七年（一七七二）卷二〇〇）には『樂府指迷一卷』を著録し、続秘笈本や城書室本・学海類編本を批判するとともに、別の箇所では次のように言う。

○考宋張炎『樂府指迷』曰、粵自隋唐以来、声詩間為長短句、至唐人則尊前・花間集。似乎此書与花間集皆為五代旧本。然『樂府指迷』一云沈伯時作、又云顧阿英作、其為真出張炎与否、蓋未可定。（卷一九九「尊前集二卷」提要）

『樂府指迷』の書名を持つ張炎『詞源』と沈義父の「樂府指迷」、全編にわたって『詞源』巻下を下敷きにした顧德輝『製曲十六觀』、この三者の關係は当時まだ定説を見ておらず、『詞源』の存在は知られていなかった。²⁴

雍正四年の古今圖書集成本・城書室本の出版から一〇年後の『宋七家詞選』・「范声山雜著」所収本まで、『樂府指迷』名テキストが各種出版され、同時に鈔本も流通していた情況は、張炎詞論が歓迎され普及していったことを物語っているだろう。浙西詞派隆盛のもと、広く知られるようになった張炎の詞論は、清朝初期の詠物篇偏重を脱してその全体が尊重された。だが限界も指摘できる。つとに康熙四十六年（一七〇七）の『御撰歷代詩余』に付された「詞話」は、清空篇・令曲篇・雜論第三条の蘇軾の和韻・第七條の雅正・第十條の蘇軾評・第十四條の元好問評を取り上げていた。その後の『古今詞論』『古今詞話』『詞苑叢談』『詞苑萃編』なども『樂府指迷』名テキストからの引用と紹介に止まり、引用は『歷代詩余』に見られる諸篇と詞源篇とが多い。張炎詞論の摂取が全体とし

てではなく好評を博する項目に偏って行われたと言つてよいだろう。それは清空・雅正の概念、令曲の難しさ、蘇軾詞の評価が詞壇の共通理解となつていったことを示してもいる。清空説受容の状況を次に見たい。

四、『詞源』二巻本出版と清朝後期以降の清空説の受容拡大

ながらく鈔本で伝わっていた『詞源』二巻本の存在を世に知らしめたのは阮元（一七六四～一八四九）である。彼は嘉慶年間に入手した元鈔本を筆鈔して『宛委別藏』に収録した。またその目録に「詞源二巻提要、宋張炎撰」として上下二巻の大体を紹介し、

○並足以考見宋代樂府之制、自明陳仲醇改竄炎書刊入統秘笈中、而又襲用沈伯時樂府指迷之名、遂失其真、と一巻本の混乱を解明した。ただ実際には、秦恩復（一七六〇～一八四三）が二巻本『詞源』（以下、秦本と称する）を収載する「詞学叢書」を出版したことによって広く知られたと見てよい。

秦恩復は嘉慶十五年（一八一〇）に初版を出版した。嘉慶二十三年（一八一八）刊行の呉衡照の『蓮子居詞話』は、初刻の秦本を指して、「其詞源上下巻、今江都有刊本（巻二）」という。秦恩復は初版を戈載校本によつて改訂し、道光八年（一八二八）再記を加えて刊行した。この再刻本が最善のテキストとして歓迎された様子は、謝章铤（一八二〇～一九〇三）の「詞源一書、以澹生居士刻本為善（『賭棋山莊詞話』卷十二）」にうかがわれる。秦本はこれより後に出版される二巻本の祖本となった。咸豐三年（一八五三）跋を持つ「粵雅堂叢書」所収本、光緒年間「思賢書局所刊詞学書」所収本、光緒八年（一八八二）の「楡園叢刻」所収本など二巻本『詞源』は次々と校訂を重ねて、民国に至るまで出版された。二巻本『詞源』の出版は、それまで『樂府指迷』名テキストの刊行で知られるようになって

いた張炎詞論の權威をますます高めた。その表れのひとつが清空説のひろがりである。

張炎の詞論では本来相互に対照すべきものとされた「清空・質実・疏快」の三概念のなかから、清空だけが元朝の『詞旨』以来張炎詞論の要諦とされた。清朝乾隆（一七三六―一七九五）年間に隆盛を極めた浙西派は姜夔・張炎を尊崇したから、彼らの詞論において清空篇への言及が多いのは当然と言えよう。だが、嘉慶二年（一七九七）の自序に周邦彦を作詞の到達点と主張した張惠言の『詞選』刊行のころから、常州派が台頭する。しかし清空説に対する批判はおこらずその後も詞壇全体に普及し、清空を言う詞論は枚挙にいとまがない。さらには張炎の清空質実の説を離れて各詞論に合わせて別の概念と結びもした。重複は省略して以下に列挙する。

清空騷雅、清空婉約：馮金伯『詞苑萃編』嘉慶十一年（一八〇六）刊

清空善軫：『蓮子居詞話』

清空一氣、清空舒展、老健清空、清空幽婉：杜文瀾（一八一五―一八八二）『愬園詞話』光緒十年（一八八五）校

清空超脫：黃氏（乾隆五十四年（一七八九）舉人）『蓼園詞評』一九二〇年排印

清空宛委：李佳『左庵詞話』光緒二十八年（一九〇二）

清空妥溜、婉約清空：江順詒（一八三二―一八八九）『詞学集成』

このような四字成語化は、第二節の明朝詩論でも見られた。胡応麟の「清空簡遠」「清空文弱」「婉轉清空」「清空雅淡」「清空流暢」、屠隆の「清空流利」、許学夷の「流暢清空」、京嗣宗の「清空流軫」、盧世淮の「清空一氣」などである。清朝詞論でも同様に四字成語化がおこったことは、清空という概念が詞壇全体で自明のものとして認識されたことを示すといえよう。いずれの詞論も特に解説を付さないし、『愬園詞話』は「健」と結ぶなど独特の用法となっていて、本来に同一の理解に基づいているのか疑問ではある。それでも明朝詩論では「流」や「軫」と

結ぶことが多いのに対して、清朝詞論では「雅」や「婉」と親和的であると言えるだろう。「清空騷雅」に典型的に示されるように、清朝文人が持っていた雅俗観のもとで、清空の概念は受け入れられやすかったと言えよう。

また「清空質実」をそれぞれ代表する「姜夔白石」と「呉文英夢窓」についてその詞の印象を比喻した「姜白石詞、如野雲孤飛、去留無跡」「呉夢窓詞、七宝樓台、眩人眼目、碎拆下来、不成片段」は、姜夔と呉文英の特質を端的に言い表すことに成功し、印象に強く残る。後者の字句は先の『四庫全書總目提要』にも引かれていたが、曹炳曾「書姜白石集後」や『絶妙好詞箋』をはじめ清朝中期以後ほとんどの詞話において言及されたと言っても過言ではない。

『宋七家詞選』より後、つまり二巻本『詞源』出版以降では、『詞源』や張炎といった名前を明記しないものも多い。

白石之詞、清氣盤空、如野雲孤飛、去留無跡：戈載「姜堯章詞選跋」

嘗謂呉夢窓詞之七宝樓台、照人眼目：俞樾（一八二二〜一八六二）「玉可庵詞存序」

昔人謂呉夢窓詞、如七宝樓台、眩人眼目、碎拆下来、不成片段：『左庵詞話』

七宝樓台、蓋薄之之辭：張祥齡（？〜一九一三）『詞論』

七宝樓台、本無事修月手矣：梁啓超（一八七三〜一九二九）『飲冰室評詞』

有名な清空篇も冒頭だけを受容するのであれば、一般の詞人には簡略でわかりやすい。その部分だけが一種の口号となつて広まっていたことが右のような文章の背景にはあるのではないだろうか。

五、『詞源』と音楽理論研究

秦恩復による『詞源』の公刊とそれに続く諸本の発行は、前節に述べたように清朝前期の状況を拡大しただけでなく、清朝中期の詞壇に新たな刺激を与えた。上下二巻本の登場によってより精密な『詞源』研究が可能になったのは当然であるが、なかでも詞の音楽研究に資するところは大きい。『詞源』二巻本が登場することによって、『秦府指迷』名テキストに無い巻上のすべてと巻下の音譜・拍眼篇それに雑論第一・九・十一・十二・十三・十五条を読むことが可能になったが、雑論以外これらはすべて楽理に関わる篇である。

韻律への言及は焦循（一七六三～一八二〇）『雕菰楼詞話』に始まる。秦恩復から初版の『詞源』を送られた彼は、
○已而秦太史敦夫以新刻張玉田『詞源』見遺、内一条記其先人賦瑞鶴仙……撰字不協、遂改為守字、始協。又作惜花春早起云……深字音不協、改為幽字、又不協、改為明字、歌之始協。……故平声字可為上入者、此也、と、音譜篇に記された張炎の父の逸事を引いたあと、撰・深の二文字が不協で、守・明の二字が協である理由を解説している。彼が『詞源』を手にしたとき最も注目したのは、その精密な詞律理論であった。

詞楽理論の引用は『憇園詞話』に始まる。詞譜声律の総論として有名な『憇園詞話』巻一「論詞三十則」は、第六則に『詞源』二巻本があることを述べ、「作詞五要」全文を引用する。また巻三に「結声正訛」への言及もあるが、『詞源』を正面に据えての議論は見当たらない。その後引用された箇所もほぼ巻上の「結声正訛・謳曲旨要」の二篇と巻下の音譜・拍眼篇に限られた。これらは楽律をはなれても四声などの声律に益する項目である。これら以外の篇に言及するのは下記の三種の詞話にすぎない。

「十二律呂」「管色応指譜」：沈曾植（一八五〇～一九二二）『菌閣瑣談』附録「海日樓叢鈔」

「十二律呂」：劉熙載（一八一三～一八八二）『詞概』同治十二年（一八七三）刊

「五音相生」「律生八十四調」：張德瀛（一八六一～？）『詞徵』

『詞源』だけでは樂理研究の資料としては不十分だが、従来の『宋史』『樂志』や『白石道人歌曲』、宋代の筆記による研究に、体系的な記述を持つ『詞源』が加わったことには大きな意味があった。だが音樂理論には専門家の議論といったところがあり、また清詞はすでに音樂を失った、つまり張炎が主張したような音樂と一体となった詞ではなかった。そのため『詞源』巻上は、詞の音樂の復元を試みる人々や詞律に特に明るい人々にとっては大変貴重な資料となったが、韻文文學のひとつとして填詞を楽しんだ多くの詞人にとっては理解しきれなかっただろう。しかしともかくも詞の韻律の複雑さを印象づけ、それが詞は詩よりも高度な韻文であるとの認識を持たせたのではなかっただろうか。

張炎詞論は現在ではまとまった詞論の最初のものであると同時に必ず参照すべきものとされる。だが、この評価が定着したのは総じてみると清朝中期以後のことである。詞を填する人々にとつて、詞論書は参考書にすぎない。明清兩朝における詞集發行との関係など本稿では十分に論じられなかったが、詞選集の編纂と同様の位置づけが可能ではないだろうか。ともあれ明朝中頃から作者が誰であるかも詮索されなままに張炎の詞論は読まれていた。これを文芸論として精密に読み解こうとする姿勢は清朝に至つて鮮明になる。考証学という學術界の新しい動向を示すものとも言えよう。研究結果は書物として出版され、読書人と刺激しあうことによつて詞学研究は進展し、そこでようやく張炎詞論の高い評価は不動のものとなったのである。同時に張炎詞論の精髓として清空説が取り出され、高度な韻文文學としての詞を填する人々のあいだで常識となつていった。一方、歌辭論としての受容は細い流れながらも元朝以降一貫して行われていたようだ。詩詞曲の垣根を越えて受容された部分も少なくない。詞が様々な文体の中間的な存在としてあり得たことの傍証となるのではないだろうか。²⁶ 戲曲との関係や曲論との交渉は今後

の課題としたい。

注

- ① 詞源研究会編著『宋代の詞論』解題、中国書店、二〇〇四年。本稿は説明の都合上これと重複する部分もある。その際には必要なる事柄のみに絞ったので、詳しくは本書をご覧いただきたい。
- ② 『詞話叢編』には元人の著作として『詞旨』のほかには『呉礼部詞話』が収録されているが、『詞源』からの直接の引用はない。
- ③ 『全明詞』については遺漏を補う論文が続いて発表されており、実際には作者数作品数ともにさらに多くなることが確実である。王兆鵬・胡曉燕「『全明詞』漏収一〇〇〇首補目」（上海大学学报十二卷一期、二〇〇五年一月）など。
- ④ それぞれ『全明詞』三十八頁、五十八頁、五十九頁。
- ⑤ 静嘉堂文庫蔵、陸心源十万卷楼旧蔵の乾隆三年（一七三八）鈔本『詞源』も同系統。
- ⑥ 刷りの状態からこの中では『欣賞編』が最も早いと思われる。『欣賞編』には多くの版があり、正徳六年（一五一一）序『欣賞編十種』が正徳中に刊行されたことが王重民撰『中国善本書提要』（上海古籍出版社、一九八三年）によって確認できるが、これには『樂府指迷』を収載しない。『樂府指迷』を収載する『欣賞編六十八種』『欣賞編別本』『重訂欣賞編』はその書体からいずれも万曆にはいつてからの出版としてよいだろう。

⑦ 筆者が調査したのは内閣文庫蔵『詩余広選』十六巻、雜説一卷、徐卓晤歌一卷。明・卓人月選、徐士俊評。崇禎二年（一六二九）の序を持ち、明刊『樂府指迷』名諸本のなかでは最も遅い。『草堂詩余』『古今詞統』の名でも出版され、比較的よく読まれたようだ。明人の詞も含めて詞牌によって分類した詞選集で、頭注および圈点を施す。集中に張炎の詞は採録しない。卓人月は詩詞曲を作

り官職にはつかなかつた。徐士俊は雜劇も数多く作っている。前掲『宋代の詞論』上梓後、目にしたテキストである。

⑧ 以上の特徴は後述の城書室蔵版『山中白雲詞』付録「玉田先生樂府指迷」（以下、城書室本と称する）と一致するが、文字については異同がある。また雜論は『詞源』名テキストと一致する。詞選集に付録された詞論はあくまでも付録であつて、標目も立てないし、詞を全首挙げなくても詞牌詞序を記せば本編を見て作品全部を読めるということなのだろう。

⑨ 清・王又華『古今詞論』〔楊升庵（楊慎）詞論〕には次の一文が引用されている。

○楊升庵曰：玉田清空二字、詞家三昧尽矣。學者必在心伝耳伝、以心会意、有悟入処。又須跳出窠臼、時標新意、自成一。若屋下架屋、則為人之臣僕。

王又華は楊慎の言葉とするが、この文章は先に挙げた『詞旨』『詞說七則』其五である。楊慎『詞品』にはこの文章はなく、王又華の典拠はいまのところ不明である。後述するように、王又華の『古今詞論』張炎詞論の引用はおそらく鈔本によつており、楊慎詞論も『詞品』ではないテキストによつたのかもしれない。楊慎の在世中には『詞源』ないしは『樂府指迷』名のテキストは出版されていないので、楊慎が『詞旨』か『詞旨』と合冊された『樂府指迷』の鈔本を見て引用したものを、王又華が誤つて楊慎自身の文章としたと考えられる。

⑩ 陳霆が蘇軾、蘇軾と和韻した章質夫、周邦彦、辛棄疾らに和韻したり、嘉靖二十五年（一五四六）の進士である孫樓（一五一五～一五四六）が柳永、周邦彦、蘇軾らに次韻したりしたのが王世貞に先行する。しかし王世貞の提唱した北宋詞人たちへの和韻が多数試みられるのは、范守己や茅維など万曆中に進士及第を果たす世代である。

⑪ 『明代詞選研究』秀威資訊科技股份有限公司、二〇〇三年。

⑫ 王世貞の詩論書『明詩評』の高啓の評には「縦負可点之瑕、奚廢連城之賞、詞家射鵬手也」とある。射鵬手は來歴を持つ言葉ではあるが、令曲篇には「亦詞家之射鵬手」とあり、張炎の詞論を読んでいた可能性を示唆する。また、『詩余広選』の編者卓

人月についての言及もあるとのことである（『明人室名別称字号索引』の卓人月の項目には王世貞『弇州山人統稿』を挙げる）。

⑬ 王世貞「二西山房記」。

⑭ 「風神」は姜夔の書論『続書譜』の眼目である。

⑮ 彼らのうち孟浩然の排律については、

○襄陽時得大篇、清空雅淡、逸趣翩翩然、（内篇卷四「近体上・五言」）

と、やはり清空を用いて評している。

⑯ それぞれ『少室山房筆叢』「二酉綴遺」下、『新曲苑』胡応麟「曲考」。

⑰ 『填詞雜說』は張世文の二首の詞を評するのに、雜論（『樂府指迷』名テキストでは第六条、『詞源』名テキストでは第十四条、以下『樂府指迷』『詞源』と略記）に元好問の詞を評して述べられた「風流蘊藉、不減周秦」を用い、『遠志齋詞衷』は雜論（『樂府指迷』第二条、『詞源』第三条）を踏まえて「張玉田謂詞不宜和韻」と論を展開する。『金粟詞話』は詞源篇（『詞源』序）を踏まえて「宋人張玉田論詞、極推少游・竹屋・白石・梅溪・夢窓諸家、而稍詘美成」と述べる。

⑱ 『古今詞話』には朱彝尊の言葉として「言詞必称北宋、至南宋始極其工、至宋季始極其變、姜白石最為傑出。…張炎玉田集、汪晋賢所購、合之周雪客所抄、暨虞山吳氏所藏、尚云未尽」という。

⑲ 張宏生『清代詞学的建構』江蘇古籍出版社、一九九八年。

⑳ なぜならば、『詞源』巻下の各篇のうち王又華が採録しなかった「意趣・賦情・離情」の三篇は城書室本にもないこと、字面篇の「(字字) 推敲響亮」及び合曲篇の「(詞難) 于小令」が城書室本に特徴的な異文（明刊本ではそれぞれ「敲打得響」「于令曲」）だからである。但し、城書室本には「作詞五要」が収録されないので、『古今詞論』巻頭の楊守齋詞論は別のテキストに依拠したものである。そのテキストは明刊本が「楊誠齋」とすると異なって正しく「楊守齋」つまり楊績の名を挙げており、或いは

城書室本本文と同系統で「作詞五要」も収録する未見のテキストがあったのだろうか。

⑲ そのほか一七八四年刊行の『雨村詞話』、時代はかなり下るが『詞学集成』も「作詞五要」の著者を「楊誠齋」とする。

⑳ 下文の「」内が注記。詞源篇「可倣倣之詞（疑脱一不字）独一美成而已」、虚字篇末（疑有脱悞）、雑論第七条「辛稼軒劉改之作豪氣詞（別本無此字）雅詞也」。

㉑ 「范白舫所刊書」所収『詞源』二卷本付記。

㉒ 『四庫全書総目提要』巻一九九「集部詞曲類存目」にはすべて張炎『樂府指迷』として引用している。『夢窓稿四卷補遺一卷』提要に清空篇の「七宝楼台云々」を、『竹屋痴語一卷』提要に詞源篇（『詞源』では「序」）の「数家格調不凡云々」を引用する。また本文中の先にあげた『尊前集』提要の「粵自隋唐以来云々」は詞源篇。巻二〇〇所収『後村別調一卷』提要には「張炎樂府指迷、譏其直致近俗、効稼軒而不及」とあるが、ここに引く文は『詞源』ではない。

㉓ 『詞壇叢話』『白雨齋詞話』『詞説』での「清虚騷雅」も『樂府指迷』名テキストに基づけばここに数えることができる。

㉔ 注⑳を参照。

㉕ 陳廷焯には光緒二十年（一八九四）序の『白雨齋詞話』もあり、「白石則白雲在空、隨風變滅」「又七宝楼台、不容拆碎」と言い換えている。

㉖ 焦循には『劇説』『花部農譚』の曲論が、劉熙載にも『芸概』に「曲概」がある。詞楽研究は曲の研究ともに行われたと言えるだろう。

㉗ 本稿を執筆するに当たっては、検索の便利のために『詞話叢編』『全明詞』『全明詩話』『詞籍序跋萃編』などによった。最善のテキストを使用したわけではないことをお断りしたい。